平成２７年度「家庭教育支援における訪問型アウトリーチ支援事業」

成果報告書

別府市教育委員会（大分県）

１．事業の題名

「	別府市家庭訪問型アウトリーチ支援事業	」

２．事業実施組織の構成

①組織の全体構成員

	所　属　・　役　職　等	備考欄
1	別府市民生委員・児童委員協議会長	
2	別府市ＰＴＡ連合会長	
3	学識経験者（別府大学准教授）	
4	別府市小中学校校長会長	
5	別府市福祉保健部社会福祉課長	
6	別府市福祉保健部児童家庭課長	
7	別府市福祉保健部健康づくり推進課長	
8	別府市教育委員会教育参事	代表
9	別府市教育庁教育次長兼教育総務課長	副代表
10	別府市教育庁学校教育課長	副代表
11	別府市教育庁生涯学習課参事	
12	別府市教育庁学校教育課指導主事	
13	別府市総合教育センター教育相談員	
14	別府市総合教育センター家庭教育支援員	
15	別府市総合教育センター所長	事務局
16	別府市総合教育センター指導主事	事務局
17	別府市総合教育センター指導員	事務局

②事業推進担当者

	所　属　・　役　職　等	備考欄
1	別府市総合教育センター所長	

３．事業の実施内容及び実施方法等

（１）別府市地域協議会の開催

目的：家庭訪問型アウトリーチ支援チームの編成・手法について検証するために別府市地域協議会を設置した。

組織：２①の全体構成員で組織し、平成２６年度は５回、平成２７年度は４回開催した。

内容：①地域の実態把握、支援方法を検討する

②訪問型アウトリーチ支援チームの編成等、事業の詳細を協議、決定する

③事業全体にかかる総合的な調整、計画、評価、検証を行う

④平成２８年度以降の取組について協議する

具体的な実施内容

	実施日	出席者数	主な協議内容
平成２６年度 第１回地域協議会	7.29	17 人	１委員委嘱状授与（教育長） ２事業の目的、内容を説明 ３「実施要綱」についての検討 ４対象児童生徒や支援する大学生の選定方法や支援方法
第２回地域協議会	9.25	15 人	１支援チームの編成のあり方 ２支援方法 ３学校との連携方法
第３回地域協議会	11.20	15 人	１支援チーム図の検討 ２対象児童生徒への支援方策
第４回地域協議会	1.22	13 人	１支援の現状報告 ２支援の更なる工夫が必要な児童への今後の取組と新たな児童生徒の選定
第５回地域協議会	3. 4	15 人	１支援の現状報告 ２「実施要綱」の改正 ３事業の検証と評価 ４次年度の計画
平成２７年度 第１回地域協議会	5.14	17 人	１委員委嘱状授与（教育長） ２「実施要綱」の改正 ３本年度の事業計画 ４支援チームの編成について ５支援の在り方及び方策について
第２回地域協議会	9. 9	17 人	１「実施要綱」の改正 ２児童生徒への支援策について ３平成２８年度以降の取組について
第３回地域協議会	12.3	17 人	１児童生徒への支援策について ２今後の取組について
第４回地域協議会	３．4	17 人	１本事業の成果と課題 ２継続児童生徒への支援策について ３平成２８年度以降の取組について

（別府市地域協議会）　　（研修会）

（２）研修会の実施

平成２６年度４回、平成２７年度４回実施した。内容、対象者等は以下のとおりである。

	実施日	講演内容	講師	対象者	参加人数
平成２６年度第１回研修会	8. 1	「児童生徒へのアウトリーチ型支援～学校・家庭・地域の連携のしくみ」	ＮＰＯ法人「ピアサポートネットしぶや」理事長	各小中学校管理職 支援チーム構成員 教育委員会関係者 各小中学校不登校等担当教員または生活（生徒）指導担当教員	64 名
第２回研修会	10. 4	「家庭訪問型支援プログラムの実際」	同上	支援チーム構成員 教育委員会関係者	17 名
第３回研修会	12. 18	「家庭訪問型支援の実際」	地域子育て支援センター「にじのひろば」代表	支援チーム構成員 教育委員会関係者	23 名
第４回研修会	2. 26	「不登校児童生徒への支援の在り方とその方策」	県教育センター教育相談部 部長	各支援チーム員 本事業により現在支援している児童生徒が在籍する学校関係職員　教育委員会関係者	32 名
平成２７年度第１回研修会	9. 28	「課題を抱える家庭への支援のあり方」	児童擁護施設「光の園」総主任	支援チーム構成員 教育委員会関係者	19 名
第２回研修会	11. 26	「別府市家庭訪問型アウトリーチ支援事業について」	別府市総合教育センター指導主事	別府市内主任児童委員	21 名
第３回研修会	1. 22	「教育心理から見た保護者支援の在り方」	別府市総合教育センター相談員	支援チーム構成員 教育委員会関係者	23 名
第４回研修会	2. 26	「家庭教育の重要性とその支援の在り方」	地域子育て支援センター「にじのひろば」代表	支援チーム構成員 教育委員会関係者	24 名

（３）支援チーム会議の実施

平成２６年度５回、平成２７年度５回実施した。会議の対象者及び内容は以下のとおり

である。

□対象者：支援チーム員（家庭教育支援員、学生ボランティア、民生委員・児童委員、主任児童委員、隣保館保育園施設長、児童養護施設ＳＳＷ、教育委員会関係者、小中学校不登校担当教員など）

□内容・守秘義務及び報告書など提出書類の管理について

・家庭訪問の留意点について

・対象児童生徒の情報共有

（家庭訪問報告書「かかわりメモ」を通して）

・今後の具体的な支援策について

（支援チーム会議）

（４）「学生ボランティア」を中心とした家庭訪問の実施

対象児童生徒

〇これまでに、１１名の児童生徒を支援

	平成２６年度	平成２７年度	備　考
女子児童	→	→	学級復帰
女子児童	→	→	学級復帰
女子児童	→		平成２７年５月支援終了
男子生徒	→		平成２７年３月卒業　支援終了
男子生徒	→		平成２７年４月支援終了
女子生徒	→	→	支援継続中
男子生徒		→	支援継続中
女子生徒		→	支援継続中
男子生徒		→	平成２８年３月卒業　支援終了
女子生徒		→	支援継続中
女子生徒		→	平成２８年３月卒業　支援終了

２年間で１１名の児童生徒に対して、支援を行った。（平成２６年度に支援が終了した生徒が１名、平成２６年度から２７年度にかけて継続支援した児童生徒は５名、平成２７年度支援開始の児童生徒が５名）

対象児童生徒１名に対して、家庭教育支援員、学生ボランティア、民生委員・児童委員など数名で組織する支援チームをつくり、学生ボランティアが中心になり子どもと関わりをもつことで、支援を進めていった。保護者に対しては家庭教育支援員が養育についての不安や悩みについて助言や支援を行った。支援チーム会議でその内容を報告し、対象児童生徒や家庭の情報を共有しながら、より適切な支援のあり方について協議し、その後の家庭訪問がさらに効果的になるような取組を行った。

（５）各学校との連携

訪問支援実施前に、学級担任等が家庭訪問に同行し、対象児童生徒及び保護者との橋渡し役となった。

また、かかわりメモをもとにして、事務局担当が、関係学校長に支援の様子等の報告を行った。対象児童生徒の登校状況を学級担任等に確認をした後、支援場所や支援内容について学校側に知らせた。支援後は、当日のかかわりメモの内容を学級担任等に伝え、学校

と連携しながら支援を継続している。

（６）他組織や関係機関との連携

〇福祉関係との連携

・別府市地域協議会で支援チームへの助言・評価

・別府市要保護児童対策地域協議会における情報共有

〇大学との連携

・学生ボランティアの募集

〇地域住民やＮＰＯ等との連携

・民生委員・児童委員地区長会議や主任児童委員部会で本事業の趣旨説明及び協力依頼

・地域子育て支援センターに協力依頼

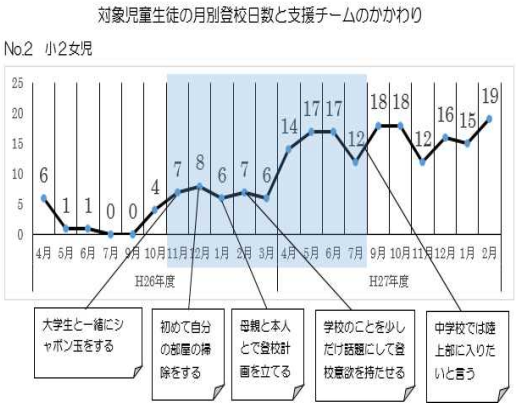
〇市内図書館、公民館等の協力（学習支援の場の提供）

（７）平成２８年度からの取組（学校運営協議会が主体となって、本事業を継続していく内容）について、市内小中学校の校長会議、教頭会議、不登校等担当者会議等で事業の進め方や支援方法等について説明した。

４．事業の実施により得られた成果・効果

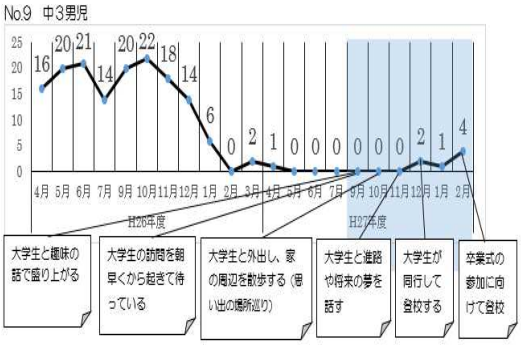
（１）支援による児童生徒の変容

□学校復帰、学級復帰できた児童



週に１回、学生が児童にかかわりをもち、本人の言動を認め励ますことにより、「外出すること」「登校すること」のエネルギーが溜まってきたと考えられる。また、母親に対しては家庭教育支援員が育児について困りや不安を受けとめながら支援を継続していき、母親自身がわが子の今後の見通しを持てたことが、登校につながったのではないかと考える。

□高校へ進路先が決まり、また卒業式にも参加できた生徒



極度の集団不適応、対人恐怖症で、家庭訪問や学級担任との三者面談は、家のふすま越しに行うという状態であったが、９月からの支援開始で、大学生が本人の長所を認めることで良好な人間関係を築いていけた。大学生が来る日には早いときは６時ごろから起きて待つこともあった。１２月には、大学生と散歩をしたり、登校したりすることもあり、数字上は登校日数０がずっと続いているが、５月から７月の０と、支援をした９月から１１月の０では、実は全く意味が違う０である。３月は卒業式練習に参加し、卒業式にも参加できた。

すべての児童生徒で「登校できるようになった」といった変容が見られたわけではないが、支援することで徐々に変化が見られてきたことは、一人ひとりの将来の人生のためには効果的な支援であり、成果と考えられる。

（２）登校できる非制度的（インフォーマル）なネットワークができたこと

民生委員・児童委員、主任児童委員、学生ボランティア、福祉部局（３課）、学校関係者、児童養護施設ＳＳＷなどのメンバーが支援チームに属し、インフォーマルなネットワークを築き、一人の児童生徒、保護者に対して、様々な角度から家庭教育支援をしていく組織ができた。次年度から学校運営協議会（コミュニティ・スクール）が中心となって、事業を進めていくモデル事業となった。　何が書いてあるか分からん

（３）保護者の理解と変容

最初は抵抗があり、家庭訪問に対して遠慮気味であった保護者もいたが、子どもが支援

の日を楽しみにしているようすを家庭内で感じ、今では子育てやしつけに関する相談を家庭教育支援員にする関係ができている。また、訪問したときの言動などから、子どもとの関わり方を改善している姿勢が見られるようになった。

（４）本事業の重要性を徐々に理解するようになり、次年度につなげることができたこと

これまでは不登校児童生徒への関わりは学校が中心に行ってきたが、教育・福祉行政機関、その他の連携による継続的・定期的に行う本事業を、市長部局や学校、関係協力団体が理解を示し、そのため、次年度も継続実施することができることとなった。

（５）教育支援室「ふれあいルーム」との連携

中２の生徒はこの支援によって、教育支援室「ふれあいルーム」に入級し、その後、曜日によって、午後学校に登校できるようになった。その他の児童生徒の中にも学校と総合教育センターとの連携で、「ふれあいルーム」への見学や相談員への相談をすることができるようになった子どももいる。

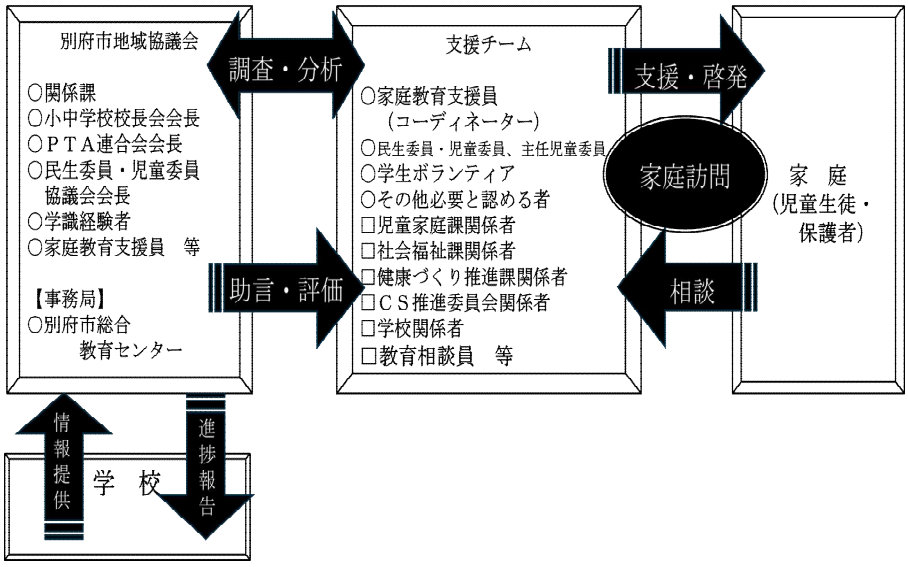
（６）学校との連携

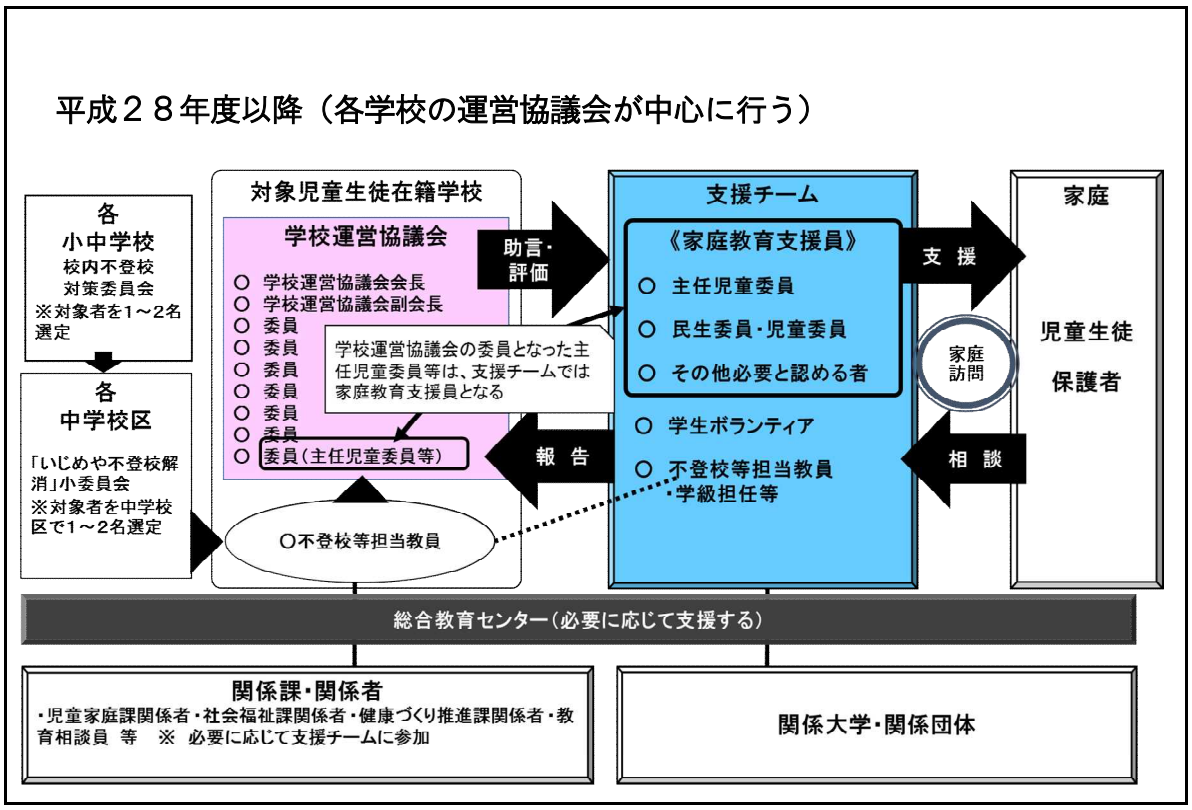
学校の家庭訪問とは別に行うこの事業は、総合教育センターが事務局であるため、学校と常に情報交換を密にとることができている。また、学級担任が授業等で家庭訪問ができない時間帯に訪問することが可能で、学校側に対しての支援にもつながっている。

５．事業の実施体制。

平成２６～２７年度

支援体制（組織）





６．事業

実施スケジュール

平成２６年度

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
別府市地域協議会				○		○		○		○		○
支援チーム会議	７月以降定例として月１回開催											
訪問型支援	７月以降、定期的・継続的に実施											
研修会					○		○		○		○	

平成２７年度

	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
別府市地域協議会		○				○			○			○
支援チーム会議	６月以降定例として２ヶ月に１回開催											
訪問型支援	７月以降、定期的・継続的に実施											
研修会						○		○		○	○	

７．事業の評価にかかる項目（事業実施前後のアンケートの実施等による事業全体の評価体制、評価手法、評価の結果）

（１）別府市地域協議会委員アンケート回答の結果　・

□平成２６年度

	そう思う	どちらかいえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
１．この事業の支援体制（組織）は適切であった	44%	44%	12%	0%
２．この事業は子どもにとって効果があった	50%	33%	0%	17%
３．この事業は保護者にとって効果があった	50%	33%	0%	17%
４．地域協議会の協議内容や運営方法は適切であった	22%	56%	22%	0%

□平成２７年度

	そう思う	どちらかいえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
１．この事業の支援体制（組織）は適切であった	71%	29%	0%	0%
２．この事業は子どもにとって効果があった	100%	0%	0%	0%
３．この事業は保護者にとって効果があった	29%	43%	14%	14%
４．地域協議会の協議内容や運営方法は適切であった	57%	43%	0%	0%

□アンケート回答結果について

①　「この事業の支援体制（組織）は適切であった」で、平成２７年度は「そう思う」「どちらかといえばそう思う」の割合を合わせると１００％であった。⇒別府市地域協議会という後ろ盾があり、その支えのもとで支援チームが効果的に支援するという体制は、今後も学校運営協議会、支援チームという形で踏襲しつつ、取組を進めていく必要がある。

②　「この事業は子どもにとって効果があった」で、平成２７年度の割合が１００％となっている。⇒支援チーム会議で適切な支援策を検討し、それを実施できた成果であると考える。

③　「この事業は保護者にとって効果があった」で、「そう思わない」「どちらかといえばそう思わない」の割合が増加している。⇒家庭教育支援員による保護者支援のいっそうの充実が必要であると考える。

（２）別府市地域協議会委員からの助言や評価

□平成２６年度

・辛抱強く支援し、目にみえる成果を早急に追わない方がよいのではないか。

・学習支援以外もよいのではないか。

・本年度築いた学生ボランティアとの信頼関係が、切れることが心配である。次年度に一からのスタートにならないような配慮が必要である。

・福祉部局からすると支援の状況がみえにくいため、支援チームと地域協議会との合同会

議や交流会があるとよい。
・初めての試みであるこの事業が、様々な機関と連携をとりながら、スタートしたことが一番の評価である。
・関係機関との連携体制の整備、情報共有ができたことが大きい。
・対象の児童生徒を少人数に絞り込み、支援チームを組んできめ細かな支援ができた。
・若い学生ボランティアが主体になり関われたことは、不登校の子どもにとって親近感ができたと思う。
□平成２７年度
・次年度もできる限り、事業継続のために予算の確保に努めてもらいたい。
・家庭教育支援員は今後、教員ＯＢ、ＯＧが担当することも検討してもらいたい。大学生にとっても、学ぶ点が多くなる。
・登校日数が増えていなくても、子どもの変化がある。効果はすぐには現れないが、この事業を継続する中で、子どものためになる点が多い。
・他の大学にも学生ボランティアがいると思うが、窓口となる教職員の理解が必要である。
・成果のみられた事例を丁寧に一つひとつ積み上げていくことが望まれる。成果が一ケタから二ケタへと上げられてくると、この事業成果の説得力が増す。粘り強く取り組んでもらいたい。
・他機関とのこまめのケース会議を開催してもらいたい。
・次年度の取組も細く長く続けていってもらいたい。
・学校に行けるようになった事例があり、そのこと自体評価できる。
・登校できるようになった児童、進路に向けて前向きに進みだす生徒がいたことは、まぎれもなくこの事業の成果である。
・小さな芽吹きを促すための、太陽・水・土・栄養分の役割を担ったのではないか。
・１００人を超える別府市の不登校児童生徒一人ひとりへの支援について検討する必要がある。
・不登校は、子どもだけの問題ではないということを真摯に受け止め、その部分からのアプローチを増やしていければ、より効果が上がるのではないかと思われる。
・関係各課といっそう連携しながら、事業を推進すべきである。
・実際に訪問したボランティアの方々から課題や要望といった情報を、こと細かく得ることができたのが一番の成果だと感じる。その情報を有効に生かしていってもらいたい。
・成果に関する事実の記載や成果が上がった場合の考えられる理由の積み重ね等をしっかりと細かく記録していくことが求められている。
・支援する児童生徒が抱える問題や家族の状況に応じ、本事業以外の社会資源を活用したり、他事業や他機関につないだりする必要がある。そのための情報収集を行ってほしい。

（３）支援チーム員アンケート回答の結果

□平成２６年度

	そう思う	どちらかいえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
１．チームの構成は適切であった	33%	67%	0%	0%
２．週に１回の支援回数は適切であった	67%	33%	0%	0%
３．支援開始前と現在で子どもの変容が見られた	67%	33%	0%	0%
４．支援開始前と現在で保護者に変容が見られた	0%	33%	67%	0%

□平成２７年度

	そう思う	どちらかいえばそう思う	どちらかといえばそう思わない	そう思わない
１．チームの構成は適切であった	21%	58%	21%	0%
２．週に１回の支援回数は適切であった	41%	53%	6%	0%
３．支援開始前と現在で子どもの変容が見られた	39%	15%	39%	7%
４．支援開始前と現在で保護者に変容が見られた	10%	36%	27%	27%
５．チーム構成は適切であった	43%	57%	0%	0%
６．児童生徒との相性はよかった	31%	69%	0%	0%

□アンケート回答結果について

①「チームの構成が適切であった」で、平成２７年度は「どちらかといえばそう思わない」が２１％ある。⇒児童生徒に対して、異性の学生ボランティアが支援することで、「気を遣った」などの発言があった。学生ボランティアの人数や開始時期によって、担当者を決めていくが、今後の検討課題である。

②「週に１回の支援回数は適切であった」で「そう思う」が平成２７年度に２６％減少した。⇒「支援回数を増やしたほうがよい」という意見や１週間の支援が定期的にできない家庭もあり、減少したと考えられる。今後の検討課題であるが、原則は週に１回と考えている。

③「支援開始前と現在で子どもの変容が見られた」で平成２７年度は「どちらかといえばそう思わない」あるいは「そう思わない」が４６％、また、「支援開始前と現在で保護者に変容が見られた」で２年間とも過半数が「どちらかといえばそう思わない」「そう思わない」である。⇒保護者の理解をもらったものの、その後、保護者や児童生徒の意向から支援が止まったケースもある。継続的な働きかけをすることの困難さがあり、今後の検討課題である。しかし、登校日数に変化が見られなくても、一人ひとりの児童生徒や保護者に変容は見られることから、今後も継続的な支援が求められる。

（４）支援チーム員の感想・意見・要望（平成２６～２７年度）

□学生ボランティアの感想

（成果）

・支援する度に子どもの表情が明るくなっていった。
・良好な親子関係が築かれつつあるのではないかと感じる。
・問いかけに対する反応が、支援開始時と比較して良くなった。
・生徒に、今後の見通しを意識させることができた。
・生徒と良好な関係が築けた。
・親子の関わり方が深くなったように感じる。
（課題）
・対象児童生徒の兄弟の登校状況等について、情報共有する必要がある。
・しっかりと活動できる学生を確保する必要がある。
・週に１回の支援では少ない。支援回数を増やす必要がある。

□その他のチーム員の感想
（成果）
・保護者と何らかの連絡が取れる体制ができただけでも良かったと感じる。
・学生の方々が、がんばって子どもに接していた。
・保護者と支援者の交流ができて、とても充実していたと感じる。
・短期間の支援だったが、チーム会議で話し合いができてよかった。
・学生との信頼関係が築けたことはとてもすばらしいと感じる。
・保護者が、来年度以降の進路の見通しを持ち始めたのでよかった。
（課題）
・子ども側に問題があるとはあまり感じない。家庭（保護者）に対して、子育ての知恵や生活上の工夫等を教える大人が必要である。
・家庭との連携の強化が必要である。
・子どもや保護者の様子を、この事業に携わる関係者へ説明する機会を持つ必要がある。
・学生との信頼関係を無にしないためにも、保護者が、家庭内において温かく支援する必要がある。
□支援チーム員の意見や要望
・今後もこの事業は継続していったほうが良いと思う。この事業に関わることができて良かったと感じる。
・保護者には子どもたちの育児にもう少し責任を持ってほしいと感じる。子どもたちには普通の生活を味わってほしい。（現実にはこれが叶わない子どもが多い）
・保護者は、生活するだけでも精一杯なのだろう。そうであれば、子どもを施設等に預けてでも成長を見守るべきだと思う。
・支援した子どもたちの将来が、学生さんや地域の方々との出会いを通してよりよいものになることを望んでいる。
・誰もが理解しやすい事業方針を徹底的にお知らせ願いたい。
・高校進学がきまり、夢を持って中学校を卒業できることになり、とても良かった。
・コミュニティスクールが支援の中心になるということで、コーディネートをする人はとても大変だと思う。それぞれのコミュニティスクールに、しっかりとしたコーディネーターの存在は必須です。学校長が異動となった学校は不安も多いと思われるので、センターからのサポートをしっかりと行ってほしい。